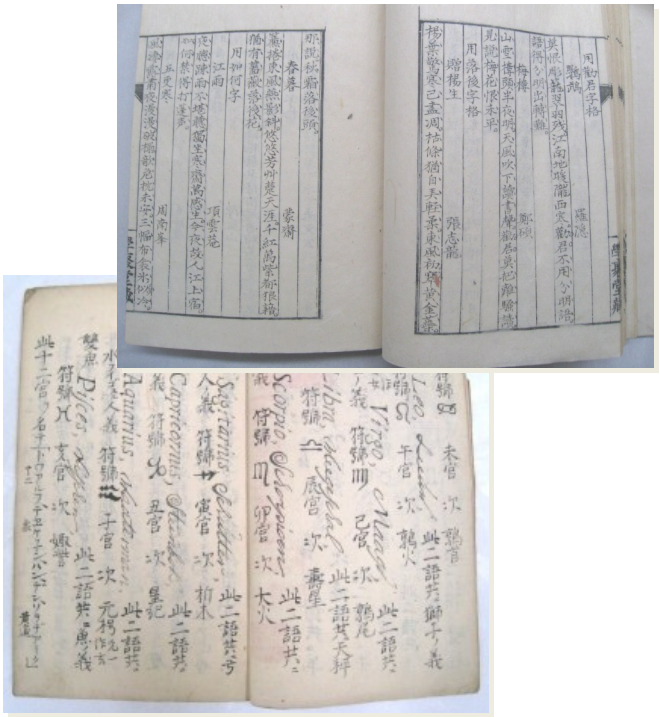
平成二十三年度京都大学新指定貴重書展

山村才助と菊池三渓

会期／平成二十三年十一月十八日（金）～二十四日（木）

午前九時～午後五時（土日祝は午前十時～午後五時）

会場／京都大学附属図書館　一階閲覧室



京都大学附属図書館

はじめに

当館では二年に一度貴重書を中心とした公開展示を行っております。今年度は久々に会場を館内に定め、平成二十一年度・二十二年度に貴重書指定を受けた資料の中から、江戸期の地理学者「山村才助」自筆本と、幕末・明治前期の儒者・文人「菊池三渓」自筆本を取り上げ、その関連書とともに展示いたします。これらの資料には、研究や文筆活動にかける筆者の情熱と旺盛な知識欲が見て取れます。

この機会に是非ご覧いただき、昔の学者文人達の知に賭ける情熱を感じ取っていただければ幸いです。

山村才助（やまむら　さいすけ　一七七〇―一八〇七）

山村才助は江戸期の地理学者。名は昌永、字は子明、夢遊道人と号す。土浦藩出身で、江戸藩邸に生まれた。大槻玄沢に師事して蘭学を学び、玄沢の私塾「芝蘭堂の四天王」の一人と言われた秀才であった。多くの蘭書・地理学書の翻訳著述を行った。代表的な著述業として新井白石の「採覧異言」の誤りを訂正した「訂正増訳採覧異言」や、幕命により訳出した「魯西亜国志」などがある。山村才助の訳出業は幕府や幕末の知識人の海外への知識の源泉となったと見られるが、惜しくも三八歳で早逝し、没後に刊行された書物が少ないため、今日、一般にはあまり名を知られていない。

●参考文献　鮎沢信太郎『山村才助』（『人物叢書』三四）

菊池三渓（きくち　さんけい　一八一九―一八九一）

幕末・明治前期の儒者・文人。名は純。字は子顕。三渓のほか晴雪楼主人、鉄屏書屋主人などと号す。紀州藩儒菊池梅軒の子として江戸に生まれる。藩主が第一四代将軍家茂となったのに伴い、将軍侍講となる。しかし、やがて政変により職を辞して退隠した。明治に入って、下館、笠間、土浦の各藩に出仕。その後、東京、京都、大阪の各地を転々としつつ、警視庁御用掛や大阪府中学一等教諭を勤めた。その一方で、新聞・雑誌等に詩文を発表し、人気を博した。主な著作に「東京写真鏡」「本朝虞初新誌」などがある。当館には、三渓の養子で日本画家の菊池左馬太郎より寄贈された自筆稿本が以前から貴重書として所蔵されている。

●参考文献　福井辰彦　「ある儒者の幕末―菊池三渓伝小攷」（『論究日本文學』八九号、二〇〇八年十二月）

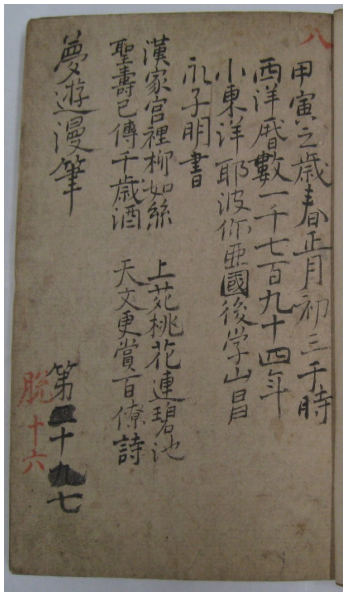
山村才助展示解説

一・夢遊漫筆

山村才助自筆　寛政六年（一七九四）

（平成二十一年度貴重書指定）

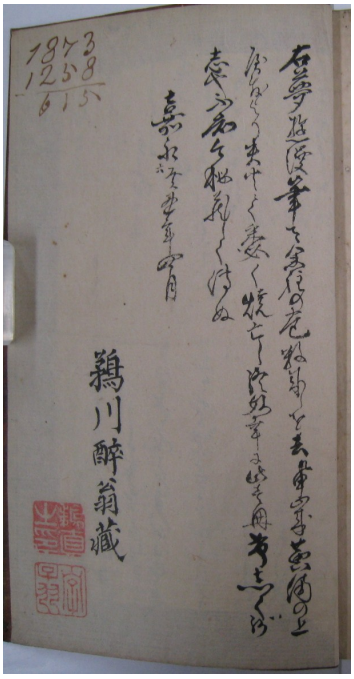
「十二宮次」にはじまり「都奈葛乙（ツナカイ）」説に終わる、山村才助自筆の小冊子。元表紙の墨書から寛政六年の雑記とわかる。本書は昭和二年（一九二七）に当館蔵書として購入されたのち、長らく普通書として配架されていたところ、松田清教授（人間・環境学研究科）の研究により貴重な自筆資料であることが確認され、貴重書指定となった。裏表紙見返しにある墨書によれば「夢遊漫筆」自筆本は余程の巻数があったが、『西洋雑記』の出版された嘉永元年、火事により焼亡し、唯一残ったものが本書である（八頁「夢遊漫筆の焼亡」参照）。才助の著書『西洋雑記』は、ゴットフリート『史的年代記』（展示資料三）その他の蘭書から珍説奇話や博物記事を抜き出して編訳したもので、もともと「夢遊漫筆」のなかに編集されていた。そのなかから最初の四巻だけが没後四十年の嘉永元年（一八四八）に出版されたものである。



『夢遊漫筆』（10-05/ム/1貴）

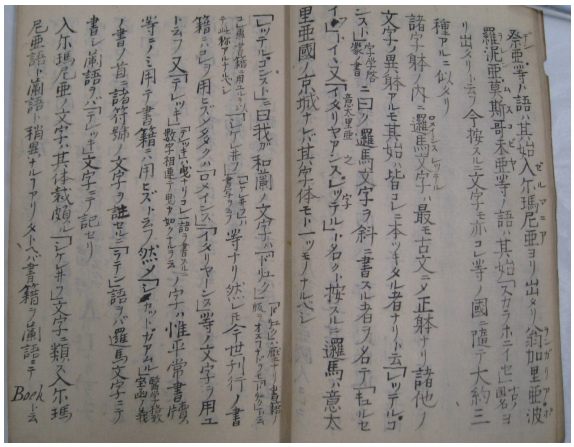
元表紙の墨書

展示箇所は、才助がオランダ語初学者用の蘭書『レッテル・コンスト』について記している部分で、展示資料二に、その部分が見られる。



『夢遊漫筆』

裏表紙見返しの墨書



＜展示箇所＞「レッテルコンスト」ニ曰・・・という記述が見える。

『西洋雑記』

嘉永元年

（1848）刊

（5-88/セ/2B）

二．Hakvoord, Barend

Opregt onderwys van de letter-konst. Amsterdam. 1752.

（平成二十二年度貴重書指定）

ハックホールト『レッテル・コンスト』。蘭学の祖、青木昆陽がオランダ語を習得するのに用いたとされる蘭書で、初学者用に単語や文章の決まりなどを簡明に記したもの。本書は、二〇〇四年度購入「蘭学関係貴重原書」のうちの一冊で、オランダの図書館でも稀少な一七五二年出版の完本である。当館は江馬本（江馬蘭学塾旧蔵本）にも『レッテル・コンスト』一冊を所蔵しているが、残念ながら本文一九―六三頁のみからなり、巻頭巻末を欠くため、版種の同定が困難である。

展示箇所は「ロメインス（ローマン書体）」「イタリヤーンス（イタリック書体）」についての解説頁。

『レッテル・コンスト』標題紙

（オランダ/KS/443/2貴）

江馬本『レッテル・コンスト』

（3-5/O6/特（江））

＜展示箇所＞

右頁の中ほどが「ローマン書体」の小文字・大文字、

同下段「イタリック書体」の小文字・大文字。

三、Gottfried, Johann Ludwig

Historisch Chronyck. Leyden. 1698.

Vol.1.

ゴットフリート『史的年代記』。標題紙欠落のため、ライデンの書店主ファン・デル・アー（Van der Aa）が出版した三巻本（一六九八―一七〇〇）、同じく四巻本（一七〇二）のいずれか不明であったが、松田教授の調査により前者の第一巻と判明。挿絵の銅版画を目当てに破り取られたようで欠丁が著しい。詳細は、松田教授のブログ「やせ細った蘭書」に綴られている（十頁参照）。本書には、内容構成または挿図の解説を墨書した貼紙が九枚ある。松田教授の研究から、これらの墨書は山村才助によるもので、この本が才助の手沢本であったこと、また、随所に「JOSIWO」の朱印・黒印がみられることから、阿蘭陀通詞にして蔵書家の吉雄幸左衛門の旧蔵書でもあったと判断される。展示箇所は才助による貼紙のうちの一枚である。

（山村才助展示・参考資料）

松田清『洋学の書誌的研究』臨川書店 1998, pp.457-468

松田教授ブログ（松田清のtonsa日記//Blog Rangaku 蘭学）http://d.hatena.ne.jp/tonsa/（参照:2011/11/09）

松田教授ホームページ「蘭学ABC」より「夢遊漫筆の焼失」http://www.users.iimc.kyoto-u.ac.jp/~z59335/index.html（参照:2011/11/09）

『史的年代記』（5-0/H3貴）

（左写真）

本文第1ページの前の図版

右頁の図版下に「JOSIWO」の黒印

（右写真）

本文第1ページ

中央図版の左下に「JOSIWO」の朱印

菊池三渓展示解説

一・学聚堂叢書

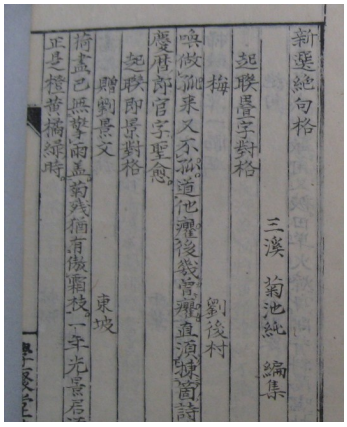
菊池三渓自筆　二十二冊

（平成二十二年度貴重書指定）

本書および展示資料二『近世古文所見集』は、長らく普通書として配架されていたが、福井辰彦氏（立命館大学文学部講師）の本学在学中からの研究により、三渓研究の重要な一次資料であることが確認され、貴重書指定となった。本書の内容は、和漢の諸書から詩文を抄出したもの。明確な方針の下に編まれているわけではなく、折りに触れ書きためたものを三十から五十丁ずつ合綴している。

展示箇所①は、津阪東陽著『夜航餘話』巻下を全文書写した冒頭部分。細かく几帳面な三渓の筆跡がよくわかる箇所である。

展示箇所②は、第二十一冊所収「新選絶句格」の冒頭部分。「三渓　菊池純　編集」と記されているが、実際は、宋・于濟が編んだ唐宋詩の選集で、近世後期の日本でよく読まれた『聯珠詩格』からの抜粋である。



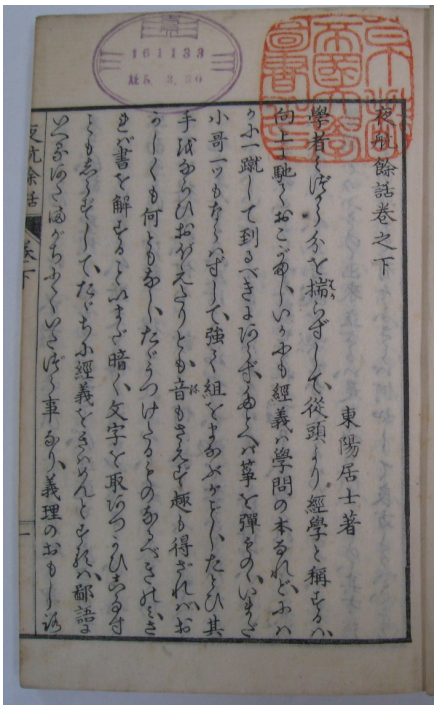
＜展示箇所②＞

『学聚堂叢書』第二十一冊
「新選絶句格」冒頭

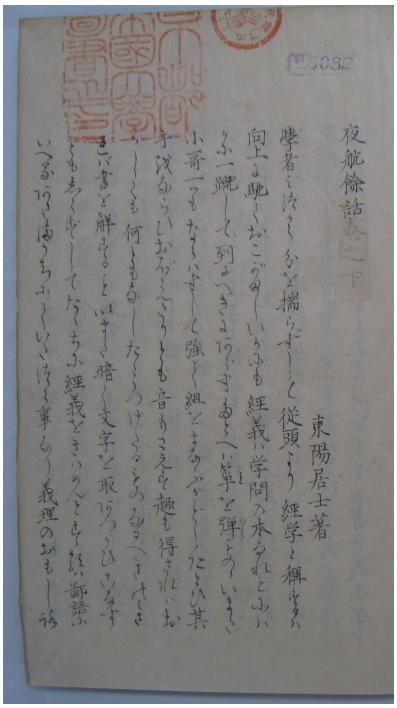
（4-02/カ/7貴）

『夜航餘話』（4-06/ヤ/1）

天保七年（1836）刊



刊本巻下の冒頭



＜展示箇所①＞

『学聚堂叢書』第七冊
「夜航餘話」冒頭

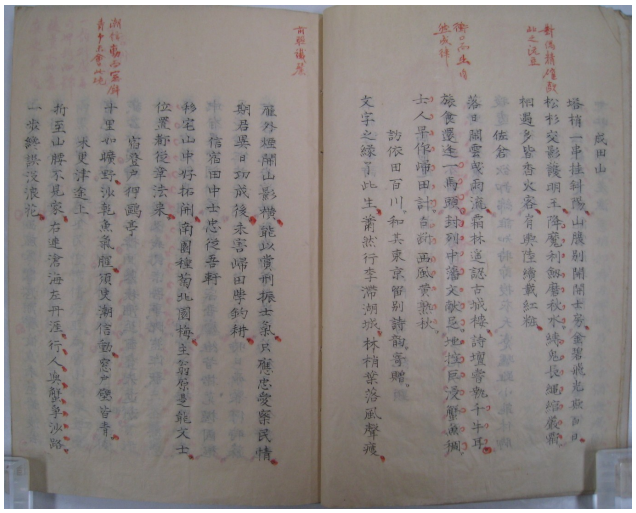
二．近世古文所見集

菊池三渓自筆　明治六年頃（一八七三）　二巻一冊

（平成二十二年度貴重書指定）

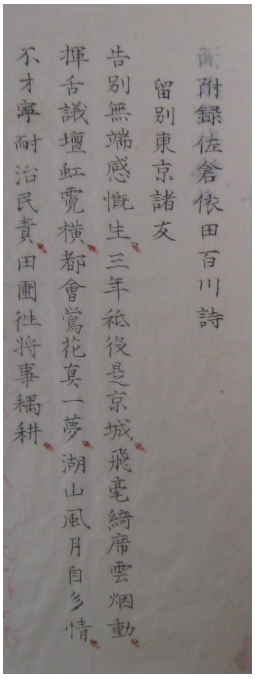
頼山陽、大槻磐渓、林鶴梁、松林飯山など、近世後期から明治にかけての儒者・文人の文二十八編を抄出したもの。『学聚堂叢書』（展示資料一）のような単なる抜書ではなく、一書としてまとめようとする編纂意図がある程度認められる。

展示箇所は、巻二に所収されている、依田学海著「白虎隊殉節図跋」の冒頭部分。依田学海は、三渓と同時期に活躍した漢学者で交遊も深かった。既に貴重書に指定されている自筆稿本の中には、三渓と学海の交遊を示す資料もある。



『酒痕灯影詩』（4-07/シ/3貴）

この稿本に所収の「訪依田百川、和其東京留別詩韻、寄贈」（三渓、七律）（写真上）と、巻末「留別東京諸友」（依田学海、七律）（写真左）は、二人の唱和。

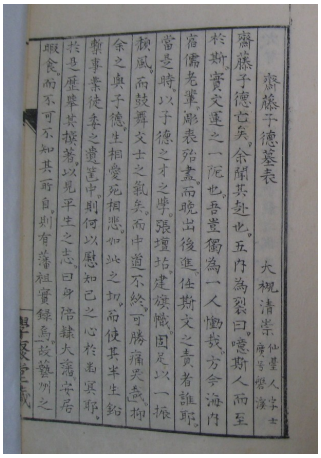


附録佐倉依田百川詩

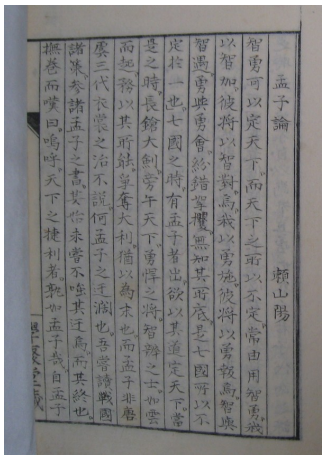
留別東京諸友

告別無端感慨生。三年秘役是京城。飛毫綺席雲烟動
揮舌議壇虹霓横。都會嘗花真一夢。湖山風月自多情
不才寧耐治民責。田圃往将事耦耕。

『近世古文所見集』（4-02/キ/5貴）



頼山陽「孟子論」の冒頭。頼山陽の文は、計三編収められている。



大槻磐渓「齋藤子徳墓表」の冒頭。磐渓の文は、計四編収められている。

『三渓遺稿』（4-05/サ/1貴）

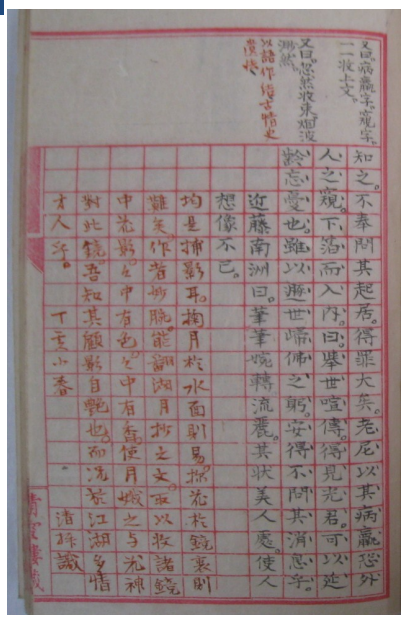
この稿本に所収の「[与依田百川書]」は、三渓が学海に宛てた尺牘。

三．晴雪楼雑稿

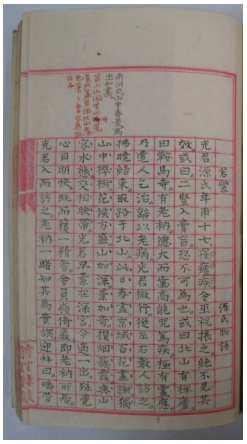
菊池三渓自筆　明治十九―二十一年（一八八六―一八八八）

既に貴重書に指定されている三渓自筆稿本のひとつ。明治十九年から二十一年の種々の文稿を集めたもの。同じ作品の重複を含め、六十三点の作品の原稿が収められている。

展示箇所は、『源氏物語』「若紫」を漢訳した部分。本書には、もう一点「若紫」があり、同じ原稿を何人かに見せて批正を依頼していたことがわかる。原稿には、批点や評語が大量に書き入れられており、当時の創作・推敲の過程や文人間の交遊の様子がしのばれる。「若紫」は、三渓著『訓点訳準綺語』（明治四十四年（一九一一）刊）に所収され発行されている。そのほか自筆稿本『晴雪楼遺稿』などに収められている草稿には、三渓の著書で有名な『本朝虞初新誌』の草稿も収められている。



『晴雪楼雑稿』（4-05/セ/2貴 ）
展示箇所「若紫」末尾。「清」は三渓の弟子だった足立敬亭（名清三）と思われる。足立敬亭は、小説家・足立巻一の祖父である。



「若紫」原稿二種の冒頭

『晴雪楼遺稿』（4-05/セ/1貴）
『本朝虞初新誌』所収「稗史小傳」の草稿。

『本朝虞初新誌』
（4-47/ホ/4）
明治十六年
（1883）刊

（菊池三渓展示・参考資料）

日野龍夫「菊池三渓自筆詩文稿」（『国語国文』四六（九）号、一九九七年九月）

福井辰彦「京都大学附属図書館蔵菊池三渓自筆稿本目録（一）―（三）」（『京都大学國文學論叢』二四―二六号、二〇一〇年九月、二〇一一年三月、二〇一一年九月）

「夢遊漫筆」の焼亡

地理学者山村才助に西洋の珍説奇話を集めた『西洋雑記』があることはよく知られている。その序文（享和改元秋八月朔旦山村昌永識とある）によれば、蘭書を読み進みながら、「読書文義語路に係る者」と「紀事奇談雑伎物産等」の二種を「懐中の小紙」に抜き書きして行くうちに、歳月と共に「筐笥中に充盈」したので、後者を『西洋雑記』と名づけ、「実学の用に中らずといへども或以て聞見を資くるに足らんか」と多少の意義を認めつつも、「君子の覧に呈」するのではなく、自分の「遺忘に供する」ことにしたと言い訳をしている。『西洋雑記』はもともと「夢遊漫筆」のなかに編集されていたもののようで、そのなかから最初の四巻だけが嘉永元年に、江戸の鈴木文苑閣から「播磨屋勝五郎蔵板」で出版された（嘉永元年戊申三月刻成）。

京都大学附属図書館所蔵の「夢遊漫筆」一冊は山村才助の自筆本で、『国書総目録』では『西洋雑記』の項目に掲載されているが、内容は「十二宮次」「西洋度量」「西洋文字」にはじまり、「天啓或問」や「磐水先生甲寅来貢西客対話」の写本をへて、「都奈葛乙（ツナカイ）」説（寛政甲寅仲夏桂川甫周国瑞識）に終わる小冊子である（本文五十九丁に元表紙と新表紙）。元表紙に「八」の朱字のあと、「甲寅之歳春正月初三于時西洋暦数一千七百九十四年小東洋耶波尓亜国後学山昌永小明書」の墨書が見えるので、寛政六年正月三日から同五月すぎごろまでの雑記とわかる。同じ元表紙に才助の自筆で「夢遊漫筆　第二十九」と書かれているが、おそらく他筆であろう、「第十七」と訂正し、脇に朱字で「脱十六」と書き加えている。

本文1オに「狩野氏図書記」「鵜羽蔵書之印」その他未詳の印記が二つみえる。「鵜羽蔵書之印」の鵜羽は裏表紙見返しに、つぎのごとく重要な事実を書き記している人物のことであろう。

右夢遊漫筆は余程の巻数成しを去る申歳黄（ママ）備の上屋敷より失火にて悉く焼亡し終始幸に此一冊けしくづしや不知今秘蔵して侍ぬ

嘉永六癸丑年四月

鵜川酔翁蔵「鵜直之印」「字子羽」（朱印）

これによって、「夢遊漫筆」自筆本の焼亡は刊本の出版された嘉永元年のことと分かる。「実学の用に中ら」ない「夢遊漫筆」の全体像は、もはや永遠に分からないかもしれない。しかし、才助は限られた蘭書を隅から隅まで読みつくし、好奇のためであれ実学のためであれ、利用できる情報はなんでも利用している。その「奇話」のなかに、聖書物語も含まれていた。「夢遊漫筆」に収められた『西洋雑記』全巻の写本がすばらしい挿絵入りで、京都府立総合資料館に伝わっているのは、不幸中の幸いである。

http://www.users.iimc.kyoto-u.ac.jp/~z59335/abc/abc_ma.html（2001/1/7）松田清研究室「蘭学ABC」より転載（アクセス日　平成二十三年十一月十一日）

イタリアンス流

アルファベットの書体に、ゴシック、イタリック、ローマンの3種があることは蘭学者にも知られていた。しかし、長崎へやってきた蘭学生や蘭癖家たちに、正しく伝えられたかというと、そ

うでもなさそうである。

大槻玄沢が天明五年に長崎に留学し、その成果をもとに天明八年（一七八八）に刊行した『蘭学階梯』をみると、ローマン書体のアルファベット大文字が二六種掲げられ、「右はロメインスホオフトテッテルと云体なり、この体尤も簡古にして、古文の正体なる者なり（後略）」と説明を加えている。つぎに、ローマン書体の小文字（Aのみ大文字と小文字a）を示し、「右はロメインセレッテルと云体なり、ロメインセは地名なり、また別にドリュクとて、印刻に用る一体あれども、近ロ刊行の書、皆此体を用ゆ」という。ここまでは、一応納得できる。

すなわち、「ロメインスホオフトテッテル」はromeinsche hoofdletter,「ロメインセレッテル」はromeinsche letterのことで、それぞれ「ローマン書体大文字」、「ローマン書体の文字」を意味する。ただし、「ドリュク」はおそらく、drukletter(活字の意味）の省略であり、文意が通じない。「近ロ刊行の書、皆此体（ローマン書体）を用ゆ」とあるので、文意から判断して、ゴシック書体をあやまって「ドリュク」と呼んだと思われる。

つぎに玄沢は、イタリック書体の小文字を掲げ、「右はテレッキレッテルと云ふ体なり、テレッキは曳なり、運筆連綿したる所を、曳とはいいしなり、此体は平生通用の書牘等に用ゆ、以上の三体は、支那に真行草あるが如し、最用の品なり」ともっともらしく解説している。この説明では「三体」は、ローマン書体大文字、ローマン書体小文字、イタリック書体小文字の三種をさすことになり、はなはだ具合が悪い。ここで「テレッキレッテル」はtrekletter（大文字）のことで、イタリック書体を意味しない。trek（引くこと）にもとづく誤った語源的説明になっている。イタリック書体のことを、当時オランダでは、italiaansche letterと読んだ。玄沢は「タラップデルエウグト」すなわちTrap der jeugd(童蒙階梯の意）という、十八世紀オランダで盛んに使われた読み方の教科書を利用して、「配韻」すなわち音節表を示しているが、肝心のアルファベット書体三種については、この原書を学ばなかったようである。

『童蒙階梯』は版を重ねてオランダ各地で出版されたが、内容はほとんど同一である。今、著者ヘルリエルスCarel de Gelliersの生地であるレーワルデンLeeuwardenのWigerus Wigeri書店が出版した一七七五年版をみると、標題紙の標題がゴシック、ローマン、イタリック、筆写体の四種で印刷され、本文冒頭の第一階梯には、これら四種のアルファベットが、Nederduysche A,B,C. Romeinsche A.B.C. Italiaansche A,B,C. Geschreven A,B,C.の名称のもとに、それぞれ大文字と小文字とも掲げられている。

玄沢よりもはやく、オランダ語の「イタリアンス流」書体に関心を寄せた人物に、加賀の蕉風俳人堀麦水（天明三年没、歳六六）がいる。「蘭語を学び妖術を知る」（金沢市教育史稿、六〇八頁）という伝説まであるところからすると、かなり蘭癖家であったようだ。その著『山中夜話』によれば、明和八年七月十五日に、大通詞楢林重右衛門、吉雄幸左衛門に従って、長崎出島の蘭館を訪れ、「カピタン部屋」で、ヘトル（次席館員）の「アルメナヲルト」、小通詞の楢林長次郎とともに、卓袱料理を食べ月見をしたことがあった。このとき、「長崎の入海を目下に見晴らして、月光万丈の銀蛇を踊らすが如し。酒三杯に至つて」、豚の煮物が出たところで、「我朝の見ざる所の興也」とて、麦水は筆をとり「いざ給へ豚名月と興ずべき」の一句を、長次郎が書いた豚の字の「蛮書」をそえて商館長に示した。ところが、ヘトルは不審顔で、出された豚を指さすだけだった。そこで「通詞則再び書して空の満月を指さしてその趣意をあらあらと告ぐ」と、やっと「万里の彼方へ蕉風の俗談

平話を正す詞おぼろげにも通じ」たという。その証拠に、ヘトルは「めづらし、不測（ふしぎ）」という意味のオランダ語を「イタリアーンスの風に」書いたのだった。麦水は「此一事今より後は可有事あらんか。是迄に我始めてならんと」思い、「豚に名月と添ふる事、一字にても俗談を雅へ引く貞享蕉風の意はなし得た」と「自負する所」があった。

この場面を絵にして麦水が版行した刷り物は寡聞にして知らないが、その上部には「イタリアーンス」風の蘭文が掲げられているという。通詞はこの俳句をローマ字書きし、「ヨロナア　クトルシユ　ヘルケンス　モウイマアーン　レイク　コーム」というオランダ語訳に漢訳（将既同心豚名月興可）を添えて、やっと理解させることが出来たという。麦水がつたえる蘭訳は、豚の「ヘルケンス」verkens 名月の「モウイマアーン」mooi maan以外は、意味不明である。長次郎は「豚　verkens　ヘルケンス　月　maan　マアーン」と「イタリアンス流に」「つる文字に横に書」き、指さして教えたという。

この自慢話から、麦水が「「イタリアンス流」と呼んだものは、「イタリック書体」というよりは、筆写体であることは明白である。蘭学の時代にあっては、欧文書体の理解は実に困難であった。（2002/1/6）

注　堀麦水『山中夜話』は『麦水俳論集』（日置謙校訂、昭和9、石川県図書協会刊）所収。

http://www.users.iimc.kyoto-u.ac.jp/~z59335/abc/abc_a.html#ita　松田清研究室「蘭学ABC」より転載（アクセス日　平成二十三年十一月十一日）

やせ細った蘭書
―ゴットフリート『史的年代記』のこと―

江戸時代における西暦の知識は、キリシタン弾圧によって一旦途絶えたあと、十八世紀後半に蘭学が勃興するにおよんで、阿蘭陀通詞や蘭学者、さらには国学者の間に広まりました。当時、西暦ひいては西洋史の知識普及にもっとも貢献した蘭書は、ゴットフリート『史的年代記』でした。

本書は聖書にもとづく編年体の世界史です。ドイツのフランクフルトで一六三〇年に初版が出ました。豊富な銅版挿絵は版画家マテウス・メリアンによります。十八世紀中葉までに六版を数え、少年ゲーテの愛読書でもありました。それまではドイツでもイギリスでも聖書にもとづく世界史が主流でしたが、フランスの哲学者ヴォルテールが聖書にもとづかない世界史『風俗史論』（一七五六）を著し、啓蒙主義的な文明史観を全ヨーロッパに広めました。

蘭学の勃興期に舶載されたのは、ヴォルテール流の世界史ではなく、ゴットフリート『史的年代記』の蘭訳だったのです。一番先にこれを入手したのは阿蘭陀通詞吉雄幸左衛門でしょう。安永七年に長崎に出かけた豊後の儒医三浦梅園は、吉雄からこの蘭書を見せられ、アダムとイヴの話を聴き、西欧には年号も干支もなく、その年が開闢以来五七二八年、耶蘇降誕以来一七七八年に当たることを知りました。

吉雄の蔵本は蘭訳第二版（一六九八）でしたが、平戸藩主松浦清（のち静山）はほどなく蘭訳初版（一六六〇）を自分の蘭書コレクションに加え、吉雄に解題をさせました。この初版は平戸の

松浦史料博物館に伝わっています。その巻頭の肖像図集からピタゴラス、ヒポクラテス、プトレマイオスの三人を選んで研究したのは、通詞本木良永でしょう。静山公は書中に見出した十字架図に注目しましたが、キリスト受難図もキリスト生誕図もすでに抜き取られて、欠落していたようです。洋風画家司馬江漢は天明八年（一七八八）に平戸で松浦公所蔵の「紅毛書数々拝見」したと自慢していますが、ゴットフリートは含まれていなかったようです。

吉雄旧蔵本は現在、京都大学附属図書館に伝わっています。これは大槻玄沢の門人山村才助の手沢本となり、世界地理書『訂正増訳采覧異言』（一八〇二年頃成立）や説話集『西洋雑記』（一八〇三年序文）の典拠に使用されました。しかし、残念なことに、タイトルページのみならず、挿絵を目当てに本文が多数、無惨に抜き取られており、才助の訳業の跡を十分にたどることが出来ません。オランダの古書店で見つけた同一版の完全本（全五六一葉、本文の銅版挿絵三〇七図）と比較したところ、計三〇五葉（図版六葉と本文の挿絵二八五図を含む）が抜き取られていることが判りました。厚さ八センチの大冊が、四センチにやせ細ってしまったのです。

本書は寛政元年（一七八九）までに江戸にもたらされ、森島中良『万国新話』（寛政元年刊）所載ロードス島「巨銅人」図、司馬江漢「ゼウクシス葡萄写生図」（寛政元年）、石川大浪の「ヒポクラテス像」（一七九九）および「西洋天地開闢図」、司馬江漢『和蘭通舶』（一八〇五）所載ロードス島「銅人之図」などの典拠となりました。「西洋天地開闢図」を除いて原図がいずれも本書から消えています。

また、抜き取られた紙葉のうちには、前後のページの片隅にわずかに映された朱色の痕跡から、吉雄幸左衛門が片隅に朱筆でマークをした紙葉があったことが分ります。これを完全本で確認すると、挿し絵に古代ギリシャの画伯ゼウクシスとパラシウスの腕比べの図、および世界開闢以来三九四七年に救世主イエス・キリストが生誕した厩の図を掲載した紙葉であったことが判明しました。

索引と本文への書き入れ、および『西洋雑記』に訳出された箇所から判断して、山村才助は完全な状態の本書を読解し、とりわけ聖書の創世記にもとづく開闢説とバビロニア、ペルシア、ギリシア、ローマの古代史、そしてキリストの生涯を熟知していたはずです。本書がやせ細りだしたのは才助の死亡した一八〇七年以降でしょう。

一方、一八一三年には平田篤胤が講談「古道大意」によって、日本が神国であることを説き始めました。間接的ではあれ、篤胤の比較文明論に強い刺激を与えたのは、才助が読み解いたゴットフリート『史的年代記』の開闢説であったと言えます。

松田清のtonsa日記 // Blog Rangaku 蘭学 by Kiyoshi Matsuda　2009-03-21より転載　（アクセス日　平成二十三年十一月十一日）

山村才助展示目録

一．夢遊漫筆

一冊　写　［書写地不明］［山村子明自筆］　寛政六年（一七九四）　［六十］丁　挿図　20.5×13cm　元表紙の墨書「甲寅之歳春正月初三干時／西洋暦數一千七百九十四年／小東洋耶波你亜國後学山昌永小明書」　後表紙見返しに「右夢遊漫筆は余程の巻数成しを去る申歳黄備の上屋敷より失火にて悉く焼亡し終始幸に此一冊けしくづしや不知今秘蔵して侍ぬ／嘉永六癸丑年［一八五三］月／鵜川醉翁蔵」の墨書あり　印記「狩野氏圖書記」「鵜羽蔵書之印」他二印　（一〇―〇五／ム／一貴、三四九二八三）（平成二十一年度貴重書指定）

二．*Opregt onderwys van de letter-konst : bekwaam om alle perſoonen in korten tijd wel ende volkomelijk te leeren spellen en lezen, alwaar 't ook datze in haar jeugd nog A nog B geleerd hadden, ten dienſt van alle gemeyne schoolen en school-meefteren, beknoptelijk t'zamen gefteld / door B. Hakvoord*

Tot Amsterdam : by Joannes Kannewet, 1752　56p. : ill. (woodcut) ; 14.5×10cm. (8vo)（オランダ／ＫＳ／四四三／二、九四〇八三七四一）（平成二十二年度貴重書指定）

三．*Historisch Chronyck.* [Vol.1]

Joh. Lodew. Gottfried's Historische kronyck :vervattende de aldergedenkwaardighste geschiedenissen van den aenvangh der scheppingh tot op 't jaer Christi 1576 : in een nette ordre gebragt na de verdeelingh van de vier monarchien, en de bondighste jaer-rekeningh.

Te Leyden : by Pieter vander Aa,　[1698]　1vol. : ill. ; 35.5×23.5cm.（五―〇／Ｈ三貴、一五三三六五）

菊池三渓展示目録

一．学聚堂叢書

二十二冊　写　［書写地不明］　菊池三渓［自筆］　22.8×16.0cm　版心に「學聚堂藏」とある罫線入り半紙を使用の冊、丁あり　菊池左馬太郎寄贈本　内容：一 随園文鈔／以下詩文抄録、二 山陽文稿／以下詩文抄録、三 竒絶志／元明史略／以下詩文抄録、四 詩文雑抄、五 詩文抜抄、六 詩文雑抄、七 夜航餘話／東陽居士著、八 史子雑説／百衲詩話／以下詩文抄録、九 三善清行封事／以下詩文抜抄、一〇 詩文雑抄、一一 籌海私議／海防私［束］／以下詩文抄録、一二 葛因是等小傳／以下詩文抜録、一三 詩文抜抄、一四―一五［讀留侯傳等］、一六 枕山詩ニ論／拙堂文話／以下詩文抄録、一七 小倉山房文約／以下詩文抄録、一八 記福田晋一遭厄事／以下詩文抄録、一九 詩文雑抄、二〇 詩文抜抄、二一 詩文雑抄、二二 詩文随鈔、二三 詩文雑抄　（四―〇二／カ／七貴、一五〇八二）（平成二十二年度貴重書指定）

二．近世古文所見集　二巻

一冊　写　［書写地不明］　菊池純(三渓)［自筆］　明治六年頃（一八七三）　22.3×15.4cm　版心に「學聚堂藏」とある罫線入り半紙を使用　巻一、巻二を一冊に合綴　菊池左馬太郎寄贈本　（四―〇二／キ／五貴、一五〇八四）（平成二十二年度貴重書指定）

三．晴雪楼雑稿

一冊　写　［書写地不明］　菊池三渓［自筆］　明治十九―二十一年頃［一八八六―一八八八］　一二三丁　23.2×15.3cm　菊池左馬太郎寄贈本　（四―〇五／セ／二貴、一五一四一）

※当館所蔵の菊池三渓自筆稿本については、福井辰彦氏「京都大学附属図書館蔵菊池三渓自筆稿本目録（一）―（三）」（『京都大学國文學論叢』二四―二六号、二〇一〇年九月―二〇一一年九月）に詳細が記されています。この度、福井氏の研究業績を受けて、福井辰彦編『菊池三渓自筆稿本目録』を当館より発行予定です。

貴重書指定に至るまで

京都大学附属図書館では、貴重書指定基準に従い、貴重書／普通書の区分を行い図書を保存・管理しています。

本展示資料の内、「夢遊漫筆」「レッテル・コンスト」「学聚堂叢書」「近世古文所見集」は、平成二十一年度・二十二年度にそれぞれ当館委員会の検討を経て貴重書指定を受けた資料です。特に「夢遊漫筆」「学聚堂叢書」「近世古文所見集」は、当館で受け入れた時には普通書として長らく館外貸出なども行われてきた資料ですが、本学ゆかりの研究者達に研究される中で資料価値を見出され本学教員の推薦により貴重書指定を受けるに至りました。

このように今回の展示では、当館所蔵資料の中でもすでに世間的に資料価値が定まった〝スター〟資料ではなく、やや地味ではありますが今まさに研究対象として解明されつつある生き生きとした資料をご覧いただきました。研究者から研究者へ、時を超えて学問への情熱は図書館を介在に引き継がれています。

監修者紹介

本展は、本学人間・環境学研究科の松田清教授と、立命館大学文学部の福井辰彦講師の研究に依拠しています。展示資料に関しても様々にアドバイスいただきました。

松田清（まつだ　きよし）　京都大学大学院人間・環境学研究科教授

略歴　一九七〇年　名古屋大学文学部文学科（仏文学専攻）卒業
一九九四年　京都大学教授（総合人間学部）
二〇〇〇年　フランス国立社会科学高等研究院客員教授
（～二〇〇〇年）
二〇〇三年　京都大学教授（大学院人間・環境学研究科）

研究分野　日本洋学史、日欧知識交流史、書誌学、江戸のモノづくり

主著、論文等
『洋学の書誌的研究』（臨川書店、一九九八）
『佐賀鍋島家「洋書目録」所収原書復元目録』（二〇〇六）
『杏雨書屋洋書目録』（武田科学振興財団、二〇〇六）
『京都大学所蔵近代教育掛図目録』（共編、二〇〇七）

福井辰彦（ふくい　たつひこ）　立命館大学文学部人文学科日本文学専攻講師

略歴　一九九七年　京都大学文学部文学科（国語学国文学専攻）卒業
二〇〇八年　立命館大学文学部人文学科日本文学専攻講師（現在に至る）

研究分野　日本近世文学、日本近代文学、日本漢文学、和漢比較文学

主著、論文等
「ある儒者の幕末―菊池三渓伝小攷」（『論究日本文學』八九号、二〇〇八年十二月）
「もう一人のお伝―菊池三渓「臙脂虎伝」について―」（『日本近代文学』八二号、二〇一〇年五月）
「立命館大学蔵山田美妙旧蔵書および美妙書入本『此ぬし』について」（『論究日本文学』九二号、二〇一〇年五月）

編集・発行

京都大学附属図書館

京都市左京区吉田本町

平成二十三年十一月十八日

表表紙　『学聚堂叢書』第二十一冊「新選絶句格」　*Opregt onderwys van de letter-konst*

裏表紙　*Opregt onderwys van de letter-konst*